

## 新舞踊運動時代の作品紹介

西形 節子

今回の主題「新舞踊運動（日本舞踊）の動向と思想」に基づき企画された、佐藤多紀三氏の講演『新舞踊運動の思想』及び古井戸秀夫氏の報告『歌舞伎俳優の新舞踊』にそって、大正元年（1912）から昭和6年（1931）までの主として舞台写真を紹介します。

また、シンポジウム『既成流派の活動』－「花柳舞踊研究会の発足を中心に」についての参考に、多少の資料も集めました。関東大震災、第二次大戦のため焼失した物が多く、ようやく花柳流家元秘蔵の写真集から採取したものです。家元宅に伺い、佐藤多紀三氏のご助力で撮影できました。なお、藤蔭会の作品も佐藤氏からご提供をいただき、『演芸画報』『新演芸』等の雑誌からスライドにするには古井戸氏のご協力をいただきました。

明治45年7月に改元した大正元年（1912）4月に長谷川時雨は、当時母が経営していた紅葉館（芝山内）で第1回「舞踊研究会」をはじめ、大正3年（1914）第7回まで続いた。長谷川時雨は坪内逍遙に認められ、明治41年（1908）歌舞伎座で戯曲『花王丸』が処女上演され、日本初の女流劇作家としてデビュー。当時若手の6代目尾上菊五郎とも親交があり、「狂言座」を結成。自作の舞踊劇を発表する。

1. 『江島生島』（1913-11-22. 23）歌舞伎座。第6回「舞踊研究会」長谷川時雨作。



第六回舞踊研究会「江島生島」

江島の局（市川男寅のち三世左団次）生島新五郎（中村米吉のち三世時蔵）。

2. 『歌舞伎草子』（1914-11）市村座 「狂言座」第2回公演 長谷川時雨作。

お国（六世尾上菊五郎）山三（七世板東三津五郎）ほか。

大正6年（1917）5月常磐木倶楽部において「藤蔭会」第1回公演が開催された。歌舞伎俳優ではない新しい女性、藤間静枝（藤蔭静枝－静樹）による新舞踊運動の始まりである。ときに静枝38歳。「藤蔭会」の命名は洋画壇の和田英作画伯。和田英作・福地信世・田中良を同人として発足、のちに香取仙之助・町田博三・遠山静雄のスタッフが参加、新しい文化創造が始まる。以下、3から13までは、「藤蔭会」のあゆみである。

3. 『藤蔭静枝』文学少女のころ、19歳（明治31年）のプロフィール。

4. 『出雲のお国』（1917-9）有楽座 「藤蔭会」第2回公演。「狂言座」で上演した。

『歌舞伎草子』を改題した長谷川時雨の作品。和田英作の装置で話題を呼び、少女時代の藤間藤子が本名田中君子で登場している。

5. 『思凡』（1921-5）有楽座。「藤蔭会」第9回公演で発表、話題を呼ぶ。

6. 『思凡』田中良のデザイン画。尼僧の姿を描いたもの。

これまでは文学的な内容や、美術がカバーしていたがここで一つの道標を樹立。福地信世が崑劇を翻案したもので、親のため尼僧となった少女が恋に目覚め、袈裟も法衣も脱ぎ捨てて俗世へ走るという作品。新しい邦楽（落合康恵・西山吟平・望月佐吉）が生まれる。伝統の呪縛からの解放を象徴する作品。この時から振付に静枝と明記する。照明に遠山静雄が初参加。田中良の簡素な装置と共に美術部門の開拓者2人の仕事の始まりである。

7. 『浅茅ヶ宿』（1920-11-29/30）帝国劇場。「藤蔭会」第8回公演。香取仙之助作。

その時の田中良の装置図である。

8. 『アンナ・パブロワと静枝』大正11年（1922）9月アンナ・パブロワ来日、帝国劇場で公演。日本舞踊会への影響は大きかった。同月「藤蔭会」第11回は、アンナ・パブロワ歓迎

公演とし、その折に記念撮影した貴重な写真である。

静枝は関東大震災の後、中山普平の音楽活動に伴い、新しい民謡の振付をして全国各地をまわった。また、勝本清一郎をパートナーとして藤蔭会を続けていたが、昭和3年(1928)パリを訪れ翌年まで滞在、その間ベルリン・パリで公演を持った。帰朝してからの静枝の作品には時代を反映した変化がみられる。9から13までは静枝の作品。

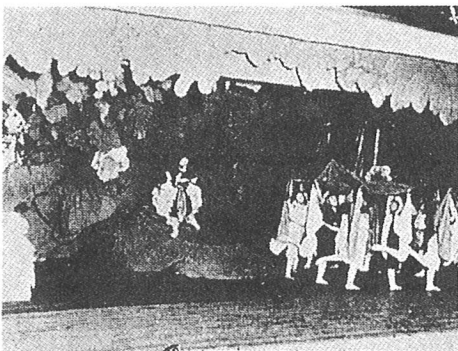
9. 『パリの戦士のパイプ』昭和6年(1931)の作品。以下、洋服姿の群舞。
10. 『ヴォルガ河の暴風雨』同上。
11. 『歯車1950』同上。
12. 『構成231』同上。労働者の姿を描く。
13. 『椿姫』昭和12年の作品。



第二回藤蔭会「出雲のお国」

次に榎茂都陸平の作品。

14. 『春から秋へ』(1921-3)宝塚少女歌劇で発表された蝶の一生を季節的に描いた群舞。  
洋楽で無歌詞の作品、原田潤。舞踊と音楽と照明と舞台装置の秩序ある組織の下に統一されて表現したもので群舞が目を引く。同年6月22~30日帝劇で上演。「春秋座の虫」に数段勝り、陸平の前途をしめす」と認められた。

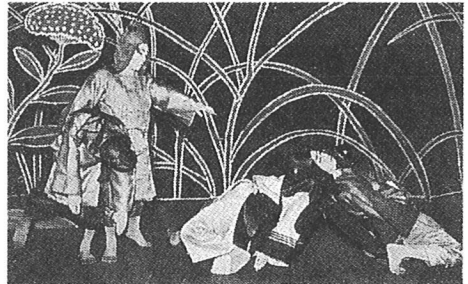


『春から秋へ』

第一次大戦後のヨーロッパを外遊した市川猿之助(のちの猿翁)は大正9年(1920)「春秋座」を結成、新しい劇と舞踊の創造を目指す。15

から18までは、その舞踊活動。

15. 新舞踊『虫』(1921-11)「春秋座」第2回公演、明治座。
16. 同 ロシアンバレエに刺激されて創った群舞。音楽・今儀修山(謹次郎)歌詞なし、三味線・尺八・琴・胡弓・木琴・オルガンなど。虫は猿之助ほか15人。風(八百蔵、小太夫)があらわれ、虫たちは死ぬ。演技は下半身が重苦しいという評。
17. 『おもちゃ店』(1922-10/11から15日間)「春秋座」第3回公演、有楽座。  
ディアギレフの「不思議な函」の翻案。西洋の焼き直し。ピカソの美術。
18. 『焼津の日本武尊』(1923-1)「春秋座」第4回公演、有楽座。生田葵作。



第二回春秋座「虫」

大正11年(1922)五世中村福助の「羽衣会」誕生。古典舞踊の復活保存と検討、新舞踊の創作発表を行い、舞踊芸術文化に寄与するのが目的。

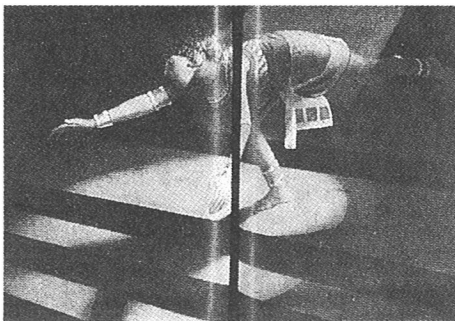
- 19~21は第1回, 22~25第2回。
19. 『潯陽江』(1922-2-26~28)「羽衣会」第1回公演、帝国劇場。  
白楽天(市川猿之助)と淪落の女(五世中村福助)「琵琶行」に取材。
20. 『夢』同上。本居長予、新歌劇風、内外楽器60人の伴奏。
21. 『鉢かつぎ姫』同上。坪内逍遙作、監督、振付は福助、井上流を研究してつける。
22. 『水と鳥』(1923-3/26より6日間)「羽衣会」第2回公演、帝国劇場。  
福助の作、水の精(福助)と子役(中村又五郎・六世中村歌右衛門)
23. 『女と影』同上。ポール・クローデル作
24. 『マグダラのマリア』同上。メーテルリンク作 山田耕筰作曲・指揮。群衆の効果
25. 『色の手網恋の関札』同上。古典復活。忍の前(時蔵)、義経(福助)寿輔振付。関東大震災後(1925-4)歌舞伎座が最終回。昭和8年8月五世中村福助没34歳。

時を同じくして、大正11年11月「踏影会」を七世尾上栄三郎が興す。その第1回から26~28、第2回から29~31の舞台を紹介する。



第二回羽衣会『女と影』

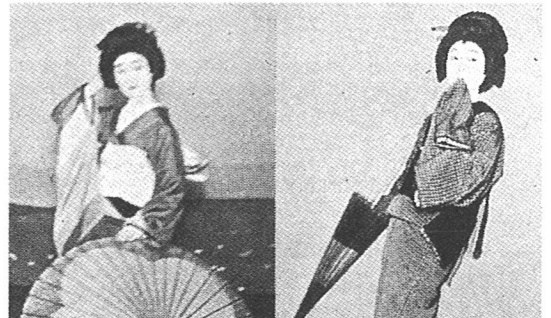
26. 『いけにえ』(1922-11-26より3日間)「踏影会」第1回公演, 市村座。引田龍太郎のオーケストラ, 六代目振付。生け贄の女が大蛇にとらわる。
27. 『陽炎』同上。大島十九郎作。五世杵屋巳太郎・引田龍太郎作曲。男女蔵と共演。
28. 『犬神』同上。古典復活。
29. 『黄昏賦』(1923-3-23から3日間)「踏影会」第2回公演, 帝国劇場。  
香取仙之助作。四世杵屋佐吉作曲。森の中に咲く烏頭花の誘惑に引かれた若者(男女蔵)が花の毒で殺される。烏頭花の精(栄三郎)はおのが身の上を嘆き男を弔う。
30. 『抱影』同上。石井漠のダンスを思わせる舞台写真。
31. 『清怨』同上。  
この後, 10月に開催予定が関東大震災で中止。大正15年5月尾上栄三郎没27歳。



第二回踏影会『抱影』

- 大正13年(1924)4月, 家元二世花柳寿輔(のちの寿応)が田中良・福地信世・遠山静雄・長崎英造を同人に「花柳舞踊研究会」発足させた。第1回から第13回一昭和6年一までの活動を紹介する。(32~55)
32. 『をしむ春』第1回(1924-4-24~25)帝国ホテル演芸場。  
大正8年11月「柳花会」で, 花柳徳次(五條珠実)により初演された作品。
33. 『五月雨』第2回(1924-9-25~27)帝国ホテル演芸場。寿輔振付。
34. 『瘤とり』第1回 お伽舞踊の嚆矢か。

35. 『蜘蛛と蝶』第2回, 日本舞踊で初めて6分の4拍子をつかう。蜘蛛の残酷な行動。
36. 『ぶり網』同 北原白秋の民謡集「日本の笛」から取材。群舞。
37. 『彦根屏風』同 寿輔振付。第2回から門下の創作を許可。『春信幻想曲』徳次振付。
38. 『死魔の踊』第3回(1925-3-28~30)帝国ホテル演芸場。
39. 『死魔の踊』同
40. 『杜若』同 童謡風の舞踊詩。徳次。
41. 『辻斬』同 寿輔構想。逆光線の影絵。鳴り物舞踊。日本の打楽器。
42. 『辻斬』同
43. 『秋』第4回(1925-11-23~24)邦楽座。ヴィオラと三味線。和製「月光の曲」
44. 『恋を知る頃』同 屏風が千代紙張り交ぜ。下町娘(寿美)男の子のお染久松の幻影。
45. 『何処へ』第5回(1926-5-27~28)邦楽座。衣装小道具振付も中国演劇風。
46. 『朝のカーテン』同 ピアノと尺八の演奏。象徴化された振付。
47. 『花瓶の絵』同 異国人の浅薄な日本評価を風刺的に描く。変わり種。
48. 『春の訪れ』第8回(1927-11-23)帝国ホテル演芸場。
49. 『四つ角』第9回(1928-10-28)帝国劇場。現代の街頭スケッチ。
50. 『虎狩』第10回(1929-4-22)帝国劇場。国姓爺の一部。荒事, 表現派的。
51. 『鶴嘴』第11回(1930-6-25)飛行会館。現代風俗労働者の群舞。打楽器。
52. 『蛇踊』同 長崎の蛇踊。
53. 『紅燈の夕』第12回(1930-11-24)飛行会館。芳次郎立案。コミックな舞踊。
54. 『夢殿』第13回(1931-11-26)仁寿講堂。上代の伸びやかさを表現純舞踊詩。
55. 『南蛮哀慕』同 寿美振付。異国情緒を振付の研究対象にしたもの。



第一回花柳舞踊研究会『をしむ春』 第二回花柳舞踊研究会『五月雨』

\*1994年度春季第37回舞踊学会『舞踊學』18号より転載